

# 国民生成装置としてのミステリ: 新日嗟峨子『金魅殺人魔術』 (二〇一八年)

倉本知明

## ミステリと怪談の共存関係

ミステリと怪談は、長らく水と油の関係と思われてきた。それは、前者が理性や合理性によって目の前の謎を解いていくのに対して、後者は迷信や非合理性に基づいた物語と考えられてきたからだ。十九世紀中葉、近代警察機構や司法制度とともに発展してきたミステリは、その登場から間もなく欧米から世界各国へと輸出され、探偵小説、犯罪小説、ハードボイルド小説、サスペンス小説と様々な分野にその裾野を広げながら、一貫して近代国家が目指すべき理性や合理性を称揚してきた。

一見、そこに怪異や怪談のような前近代的な世界観が入り込む余地はないように思われるが、ミステリと怪談が非常に近い関係性にあったことは、実は早くから指摘されてきたことでもある。例えば、日本の探偵小説のパイオニアでもある江戸川乱歩は、評論「怪談入門」(一九五一年)において、探偵小説と怪談の類似性について、ポーやウェルズなど、数ある英米のゴシック小説や探偵小説を参照しながら、「探偵小説と怪談とは不可分の関係にあ」って、自身の作品も含めて「日本の所謂探偵小説の少なくとも半分は怪談に属する」と述べている。

怪異や超自然現象と思われた現象や犯罪が、最終的に近代合理主義者である主人公らによって解決されるといったミステリのプロットは、多くの探偵小説に見られる特徴でもある。例えばそれは、大正時代に一世を風靡した岡本綺堂の「半七捕物帳」シリーズや、戦後人気を博した横溝正史の「金田一耕助」シリーズなどにも顕著である。岡っ引きの半七は、江戸時代に生きながらも近代的自我をもった存在として迷信が生々しく生きる江戸の未解決事件を解決していくし、横溝正史の金田一耕助にしても、『八つ墓村』など、怨霊に呪われた人々といった前近代的な論理に生きる人々が理性によって解放されていく物語である。推理の主体は怪異や迷信を信じることのない近代的自我や理性を備えた主人公であって、彼らが前近代的な闇を利用する狡猾な犯人たちの犯した犯罪を暴き出し、告発していくことにこそミステリの醍醐味があった。

言葉を換えれば、ミステリが希求する謎解きと怪異が持つ神秘性とは元来親和性が高く、相互補完的な関係にあったのだ。ミステリは怪異によってその正統性を得、同じく怪異はミステリによって、科学と合理性が支配する近代国家において延命してきたのである。その点からいえば、近代国家の登場と軌を一にして生まれたミステリは創作と閲読を通じて、古い共同体の間で共有された迷信や怪異を乗り越え、理性と合理性を兼ねそろえた近代的自我を生産するための国民生成実践の場でもあったともいえる。

こうした歴史的な文脈を踏まえて考えてみた場合、新日嗟峨子(瀟湘神)の長編ミステリ小説『金魅殺人魔術』は、伝統的なミステリからは大きく外れたプロットが打ち出されている。本作は典型的な「館モノ」を扱った推理小説のようでありながらその実怪異の存在自体を否定しておらず、また聡明で理性的な登場人物は事件の解決によって前近代的な迷信や蒙昧を糾すことなく、むしろそうした怪異を前提に都合の悪い真相を書き換えていく。いわば、真実が主人公によって隠されてしまうミステリでもあるのだ。

怪異とミステリを組み合わせ、そこに複数の「真相」を持ち込むといった創作手法は、一九九〇年代以降における日本のミステリ作品に散見されるが、「推薦序」と「後記」を見ても分かるように、作者である新日嗟峨子(瀟湘神)は、そうした作品の影響を強く受けている。本論では、作者自身はその名を挙げている小野不由美、城平京、京極夏彦ら日本の怪異ミステリを例に、『金魅殺人魔術』が台湾で書かれたことの意味について考えてみたい。

## 真実よりも真相を！—「ポスト 真相」時代におけるミステリ

ここで、簡単に『金魅殺人魔術』のストーリーを紹介しておく。本作はパラレルワールド的な植民地台湾を舞台にした長編小説『台北城内妖魔跋扈』(二〇一五年)、『帝国大学赤雨騒乱』(二〇一六年)に続いて発表されてミステリ小説である。

物語は明治三十三(一九〇〇)年、かつて滬尾一の勢力を誇っていた英国商人ウインストン・ゴールドスミスが自殺したニュースからその幕を開ける。滬尾の人々はウインストン氏が秘かに「金魅」を飼い、その報いを受けたのだと噂していた。金魅とはかつて台湾で信じられていた妖怪の一種で、契約を交わした人間は金魅を自由に酷使できるが、その代償として毎年必ず人間を一人犠牲にする必要があるとされていた。ウインストン氏が亡くなる前、ゴールドスミス家では屋敷の人間が身に付けていた服と髪の毛だけを残して、突如蒸発するといった怪事件が立て続けに起こり、ウインストン氏の死はそれを苦にしたものだと噂されていた。葬儀が行われることになったゴールドスミス家では、この怪異の原因を解き明かそうと、言語も人種も民族も異なる個性豊かな面々に加え、台湾の神々が遣わした信徒に日本の妖怪たちまでが現れる。物語は主に天上聖母の神託を受けた滬尾の青年邵年堯と、ウインストン氏の旧友で、探偵小説を熱愛する杉上華紋子爵の視点から進んでいく。金魅はなぜゴールドスミス家に現れ、崇られた人々はどこに消えたのか。ウインストン氏はなぜ自殺しなければならなかったのか。陰陽師としての身分を隠し持つ杉上華紋は、複雑に入り組んだ事件の解明に乗り出す。

まず、作品の背景となっている植民地台湾が一種のパラレルワールドであることに着目したい。前述したように、本作は『台北城内妖魔跋扈』、『帝国大学赤雨騒乱』に続いて発表された作品で、台湾が戦後も日本の植民地であり続ける(であろう)という設定は継承されている。また、前二作では明らかにされていなかった「台北結界」の創設者とそのからくりについても詳しく

触れられている。物語においてキーとなる台北結界とは、日本の植民地当局が台湾を植民地支配するにあたって作られた一種の妖怪生成装置で、「言語道断」と呼ばれる日本の大妖狐の妖気によって台湾人の思想をコントロールしようとするものである。この台北結界の存在によって、妖怪や怪異の存在が物語の前提となっているわけだが、前近代的な世界観が近代以降の世界に併存する一種の平行ワールドを基にした創作スタイルは、小野不由美の伝奇ミステリ『東京異聞』（日本では一九九四年出版、台湾では二〇〇六年出版）にもそのプロットが見られる。

『東京異聞』は、明治二十九年に帝都を襲った一連の変事とその謎を追う新聞記者の活躍を描いているが、物語の舞台となるのは現実の東京ではなく、「東京」と呼ばれるもう一つの世界の出来事である。平行ワールドである「東京」の夜には数多の異形の者たちが跋扈しているが、『金魅殺人魔術』においても一連の変事が起こる「淡水」は一貫して旧名である「滬尾」の名で呼ばれ、大妖狐言語道断や妖怪髪切、天上聖母や大道公といった神明妖魔が跋扈する世界として描かれる。一見文明開化に沸くように見える「東京」が現実の東京ではないように、滬尾もまた現実の滬尾／淡水でなく、現実と幻想の境界線上に描かれた幻の都市であるのだ。『東京異聞』において、主人公らは夜道で辻斬りを行う「闇御前」や全身火だるまで姿を消す「火炎魔人」といった怪異の謎を合理的に解決しようとするが、結局その期待も最終的には裏切られてしまう。

怪異や妖怪の存在が前提とされている世界に起こる一連の事件は、決して人間的な思考だけでは謎が解き明かせない。『金魅殺人魔術』においても、推理は唯一の真相にいたる過程ではなく、解釈によって世界を築き直すことにその重点が置かれている。例えばそのことは、杉上華紋が真相解明を求める加賀巡査に向かって、「世人都愛好『真相』，無論那個『真相』是不是『真實』！」と言い放つ様子からも伺い知ることができる。解釈による「真相」の創造は、テキストで杉上が滔々とその理論について語る「理気論」において最も端的に現れている。

杉上は宋朝に興った「理気論」を以って、経済の貨幣制度を例に妖怪（更には神々さえも）が人間の想像によって生まれた存在であることを説いている。

「在漫長的歷史中，人類的造物難道少了嗎？而人類創造出來，最後卻無法掌握的東西，難道又少了嗎？而且這也不是隨便就可以創造的，要形成『理外之理』，就必須具有干涉世界活動的能力，就像三人成虎，要不是一定的人數煽動，不足以影響人的活動，反過來說，如果本來荒謬的事，在某個特定情況下會顯得不荒謬，那『理外之理』就算成立了。（261頁）

ネットやSNSが普及した二〇〇〇年代以降、推理が唯一の真実に辿り着く方法ではなく、数ある解釈や真相を作り上げていくといった創作プロットは、日本のミステリに新たな潮流を生ん

だ。推理による真相解明よりも周囲の共通認識をいかに獲得するかといった「推理の目的化」は、ネット空間における真実の不在と同時に、場の空気を読むことが重視される日本社会に特有の現象ともいえだが、こうした「ポスト<sup>トウルース</sup>真実」を描いた代表的なミステリとして、ここでは作者がその名を挙げる城平京『虚構推理 鋼人七瀬』（日本では二〇一一年出版、台湾では二〇二〇年、ただし漫画版は二〇一六年に出版）を見てみたい。

第十二回本格ミステリ大賞を受賞した『虚構推理 鋼人七瀬』は、超能力や超常現象の存在が前提とされた上で、解き明かすべき謎が存在しないミステリである。物語に登場する「鋼人七瀬」はネット空間が生み出した怪異で、謂わば概念が実体化した存在である。『金魅殺人魔術』を例にとれば、鋼人七瀬といった「理外之理」に「気」が付与されてしまった存在といえる。

最初は何もありませんでした。ただの作り話でした。けれど名前と形を得た虚構は、何千、何万、何十万という人間の頭の中に根付き回ることによって少しずつ血肉が与えられ、実体を得てしまうこともあるんです。人間の想像力が怪物を生み出すんです。

(109 頁)

こうした「概念」としての怪異を倒すために、テキストでは幼い頃に神隠しにあって知恵の神として妖怪たちから信頼される岩永琴子や、妖怪「件」と人魚の肉を食べて未来確定能力と不死の力を手に入れた桜川九朗らが、新たな「虚構」をアップデートしていくことによって、怪異の存在基盤そのものを失わせようとする。桜川九朗の元恋人である弓原紗季が述べるように、『虚構推理』のプロットは「いもしない犯人と真相を作り出すこと」であって、「推理ではな」く「とんち」に近いものである。重要なのは真相に辿り着く推理ではなく、推理を行うことで真相が形作られていくという点である。この点に関して、日本の推理小説を研究する諸岡卓真は、『虚構推理』は、真実を『発見』する推理の物語を、『上書き』する推理の物語へと更新したのである」と述べている。

これを再び『金魅殺人魔術』に置き換えると、その類似性とユニークさが明らかになる。ゴードスミス家に現れる日本の妖怪たちは、「金魅」という台湾民俗に息づいた怪異を「髪切り」という日本由来の妖怪へ再生成しようと試みているが、ここでもそれぞれの思惑をもったグループが、自分たちの推し進める「真相」を「とんち」によって上書きしようとしている。

總之，你們之所以散播『髮切』傳說，就是為了讓人相信這些怪事也可能是髮切所為，進一步生成『髮切』。」

可以預想的。「髮切作祟」雖然乍之荒唐稽，但只要能在人們心裡留印象就好，接著，夏目只需以妖怪能力模仿髮切作祟，就會產生說服力。任何理論只要一度被證實，就能在人心打下一枚可信的釘子。夏目之所以編織髮切作祟的遠因，裁臧高思宓家，

也是為了提高可信度。對人類來說，只要「這一切是有原因的」，無論那原因是真是假，都會傾向相信。

這些妖怪的目的，是將本該生成的臺灣妖怪，轉化成日本妖怪。(292 頁)

事件には真実の他に多数の解釈があつて、解釈とは人々が受け入れられる真相をどのように作り出すかにかかっている。さらに従来のミステリにおいては、最終的に打倒されるはずであった怪異は、むしろ主人公たちの思考を補助する重要な要素として機能している。本来真相を暴くべき立場にある杉上華紋は陰陽師の身分を隠し持ち、邵年堯や盧順汝ら滬尾の信者たちは天上聖母から特殊能力を与えられ、彼らはそうした超自然的な現象を用いてそれぞれが願う「真相」に近づこうとする。

こうした点から見れば、日本の怪奇ミステリである『東京異聞』や『虚構推理』などの影響を受けた『金魅殺人魔術』は、いわば「ポスト <sup>トゥルース</sup> 真実」における解釈をめぐる物語でもある。それでは、作り出された真相に解釈を与えることで、新日嵯峨子／瀟湘神はいったい何を伝えようとしているのか。

## 失われた台湾民俗学の可能性

『虚構推理』における鋼人七瀬は、ネット空間という新しいメディアを背景にして生まれた都市伝説であった。だからこそ、岩永琴子はこれに新たな物語を書き加えることで、鋼人七瀬の存在基盤を失わせることができた。しかし、ジョージ・マッケイや簡大獅など、実在の歴史人物も数多く登場する『金魅殺人魔術』は、唯一の真実を複数の真相によって「上書き」する作業を行いながらも、『虚構推理』のような歴史的背景を持たないネット空間を背景とした物語ではなく、むしろ二十世紀初頭の植民地台湾という非常に複雑な歴史的背景をその基調としている。この点については、京極夏彦による「百鬼夜行」シリーズと比較すると、その意図するところが分かりやすい。

「百鬼夜行」シリーズは、昭和二十年後半の日本を舞台に、陰陽師で拝み屋でもある「京極堂」こと中禅寺秋彦が、不可解な難事件を解決していく人気ミステリ小説である。本シリーズの各巻にはそれぞれ日本固有の妖怪の名が冠され、作中では一見すると妖怪変化の仕業に見える怪異が数多く発生するが、最終的には京極堂の「この世には不思議なことなど何もないのだよ」というセリフとともに、怪事件は合理的に解決されていく。京極堂は事件の概容から特定の「妖怪」を連想して、その成立過程や歴史背景を詳細に語るが、そのクライマックスでは陰陽師の黒衣を身に着けて人々の心に浮かんだ怪異の正体を合理的に明らかにし、「憑き物落とし」と呼ばれる儀式を執り行うことで物語における秩序を回復している。

登場人物にいったん「呪い」をかけて、それを妖怪のイメージで結実させた後に払い落として

やるといった「百鬼夜行」シリーズの大きな特徴は、主人公である京極堂自身が怪異の存在を強く否定している点にある。「遍く怪異と云うのは受け手の内部で構成されるもの」とする京極堂は、妖怪や怪異を一種の「概念」として捉えているのだ。しかし、かつて妖怪博士井上円了が妖怪や怪異を科学的に排斥したのとは違って、京極堂はむしろ「概念」として捉えられた怪異の文化的意義を大いに認めている。

例えば、同シリーズ第一作『姑獲鳥の夏』（日本では一九九五年出版、台湾では二〇〇七年出版）において、京極堂は幽霊や怨念について次のように語っている。

誰も嫌いだといっているんじゃない。創作としての怪談話やなんかはむしろ好きさ。そもそも過去の人人が培ってきた文化だの精神生活だのを語るなら、所謂怪異譚というヤツは欠かせない。しかし、長年月の間に、我我は本質を見失っている。江戸時代の山村で交わされる妖怪談と、現代の都市で語られる幽霊談は自ずから意味が違っているのだ。(27頁)

怪奇的な事件を通じて「概念」としての妖怪がいかに生まれ、存在してきたのかを考察する京極堂の思考回路は、ミステリ小説の研究者である乾英治郎が述べるように、従来民俗学者や文化人類学者の行ってきた仕事であった。現代社会ですでに失われてしまった過去のコードを修復する作業を通じて、京極堂は怪異の「概念」を明らかにし、その上で怪異が祓われた「現実」に人々を引き戻そうとしているのだ。

膨大な知識を用いて事件を解決へと導く京極堂は、『金魅殺人魔術』において同じく謎を解く立場にある杉上といくつか共通点がある。両者は怪異が信じられている世界において、その謎を解き明かす役割を担いながら、陰陽師という前近代的な属性も備えているのだ(ちなみに、『東京異聞』においても陰陽師は重要な役割を演じている)。しかし、京極堂が博学な知識によって「憑き物落とし」を行い、最終的には怪異を信じる人々に「現実」への回帰を呼びかけるのに対して、杉上は同時代における金魅のコードを結果的に修復しながらも、それによって金魅が生き続けられる新たな現実に手を貸している。二人の陰陽師の「真相」へのスタンスの違いは、日台両国において民俗学的なコードがどのように維持されてきたのかといった問題を考慮する必要がある。

明治以降、日本では井上円了のように怪異や妖怪の存在を科学的に否定しようとする研究者たちがいる一方で、柳田国男に代表されるような民俗学者らが、そうした非理性的・非合理的な存在を学問的俎上に載せて議論を続けてきた。それは、1935年に設立した「民間伝承の会」が、戦後も「日本民俗学会」と改称されて現在まで活動を続けてきたことから、民俗学が一貫して日本のアカデミズムの重要な一端を担ってきたことが分かる。謂わば、迷信や怪異を否定する近代において、怪異を信じる世界観は近代国家や資本によって破壊され続けながらも、民俗学をはじめとする学問的基盤によって常に調査・保護され続けてきたのだ(しかし、そのこと

は必ずしも人々が怪異を信じる世界に戻れることを意味しない。あらゆる近代化は不可逆的であるし、高度資本主義社会において、怪異や妖怪はむしろサブカルチャーの分野において大量消費される「商品」へと変わっていったともいえる。

一言語一民族一国家を理想としてきた近代国民国家の形成過程において、民族文化の基盤となる「民俗」は常に発見／創造され、それらが予定調和的な国民文化として学問的にまとめ上げられることで、均質な「国民」という虚構が形成されてきた。柳田国男が提唱した「一国民俗学」に代表される民俗学の功罪とそれへの批判は、日本においては一九九〇年代後半以降、カルチュラル・スタディーズやポスト・コロニアルの文脈で盛んに行われてきた。しかし、自前の国民国家を形成できなかった台湾においては、そもそもそうした民俗の存在自体が忘れられてきたのであった。

戦後長らく土着文化が取り締まられ、公共教育機関で非国語による会話が禁止されてきた台湾において、怪異や妖怪を語る民間伝承が生き残れる空間は決して大きくなかった。台湾における民俗学への関心は、古くは伊能嘉矩の『台湾文化志』（一九二八年）や池田敏雄主編の雑誌『民俗台湾』（一九四一～一九四五）にまで遡るが、戦後台湾では現在にいたるまで、民俗学がアカデミズムの一端に制度として位置づけられたことはなく、林承緯が述べるように、あくまでそれは人類学や歴史学の傍流として位置づけられてきたに過ぎない。戦後幾度か越境的な学術的関心が台湾民俗学に向けられたこともあったが、前近代的な集合記憶でもある妖怪や怪異譚の民間伝承が、とりわけ台湾文学の分野において積極的に語られるようになるには、二〇一〇年代以降に登場する台北地方異聞工作室や何敬堯、瀟湘神らによる創作を待つ必要があった。

「この世には不思議なことなど何もない」と考える京極堂は、姑獲鳥や魍魎、狂骨や鉄鼠といったある時代の共同体によって共有された「概念」のコードをその豊富な歴史や民俗学の知識を使って復元してから、それらを「憑き物落とし」によって否定していく。乾英次郎が指摘するように、京極堂による「憑き物落とし」は、一九五〇年代の物語として描かれながらも、執筆時に起こった一連の社会・文化状況（阪神淡路大震災やオウム真理教事件）を多分に反映している。バブルという「憑き物」が崩壊した後に新たな「真相」が数多く提示されていた当時の日本社会において、京極堂は「憑き物落とし」を通じて、辛く不愉快な「現実」への回帰を呼びかけてきた。しかし、同時に読者たちは、その過程においてそうした「概念」を生み出した日本の歴史やその精神構造を追体験することで、近代以降生み出された「日本人」の輪郭を再認識してきたのでもあった。

翻ってそもそも民俗学がアカデミズムの一端にその位置を占めることが適わず、また民間においても長らくその伝承を語ることが許されてこなかった台湾において、まず認識されるべきは「概念」の存在であって、それは近代以降失われてしまったコードを取り戻す作業でもあった。二〇一四年のひまわり学生運動以降活発化した台湾妖怪をめぐる出版ラッシュは、まさに失われ

たコードを取り戻すための第一歩といえた。

その意味で、現代台湾においてはすでに忘れられてしまった「金魅」なる怪異は、テキストにおいて近代主義者たる主人公の理性によって殺されてはならず、生き延びることによってこそ、忘れ去られた台湾妖怪とそれに連なる文化的コードの復元が完成するのだ。京極堂と杉上華紋は、同じく読者に怪異や妖怪などの呪いをかけるが、前者はそれを「憑き物落とし」として取り除き、後者はその呪い／「理」を実体化させていくことで、台湾社会が近代化／植民地化の過程で失った記憶を喚起している。そうした点から見れば、瀟湘神が『殖民地之旅』(二〇二〇年)で主張した「ポスト外地文学」とは、失われたコードを現前化させる「呪い」の一種ともいえる。

冒頭において、近代に興ったミステリ小説を理性と合理性を兼ねそろえた近代的自我を生産する「国民生成」実践の場であると述べたが、『金魅殺人魔術』に代表される新日嵯峨子の作品群は、創作／閲読を通じて「台湾人」という新たな共同体を生み出す「国民生成」の場として機能しようとしているのかもしれない。



著者

倉本知明

1982年、四国の海辺の町に生まれる。立命館大学博士課程卒業、専攻は比較文学。現在は高雄市に在住、文藻外語大学で日本語や日本文化などを教える。創作と翻訳の仕事を兼任、台湾文学の日本語訳に力を注ぐ。日本語訳に蘇偉貞『沈黙の島』、伊格言『グラウンドゼロ 台湾第四原発事故』、王聰威『ここにいる』、吳明益『眠りの航路』、張渝歌『ブラックノイズ 荒聞』、游珮芸、周見信『台湾の少年』、古庭維、Croter『台湾鉄道』、郭強生『ピアノを尋ねて』など。中国語訳に高村光太郎『智恵子抄』など。